

幼児教育・保育におけるアサーション・トレーニングのイメージ

高橋 均¹

Images of the assertiveness training in early childhood education and childcare

Hitoshi TAKAHASHI

本研究の目的は、幼児教育・保育にアサーション・トレーニングを取り入れることに関して保育者経験者が持っているイメージを明らかにすることであった。2名の保育者経験者を対象にPAC分析を行った結果、「アサーション・トレーニングの否定的側面」、「アサーション・トレーニングの肯定的側面」のクラスターや、「ルールのある活動中における（アサーション・トレーニングの）可能性」、「普段の園生活における（アサーション・トレーニングの）可能性」、「プロセスの決まっていない活動中における（アサーション・トレーニングの）可能性」のクラスターが明らかになった。また、保育者経験者は、アサーション・トレーニングとそれに関連する活動に対して-イメージだけでなく、+イメージも持っていることが明らかになった。

Keywords : アサーション, 幼児教育, 保育

問題と目的

本研究の目的は、幼児教育・保育にアサーション・トレーニングを取り入れることに関して保育者経験者が持っているイメージを明らかにすることである。

未だ発達過程にある幼児には、対人関係やコミュニケーションの面において様々な問題行動が見られる。西方・細野・濱野（2009）は、幼児の問題行動を研究し、男児の問題行動のうち「言葉遣いが悪い」、「よく言い訳をする、他人のせいにする」の項目に対して保護者が「困っている」、「とても困っている」を選択した割合は年少<年長であることを明らかにしている。また、女児の問題行動のうち「自己主張ができない、言いたいことが言えない」の項目に対して保護者が「困っている」、「とても困っている」を選択した割合は年少<年長であることを明らかにしている。この結果は、年少から年長にかけて「言葉遣いが悪い」、「よく言い訳をする、他人のせいにする」男児が増え、「自己主張ができない、言いたいことが言えない」女児が増えていることを表している。

このような攻撃的な表現、非主張的な表現の問題の解決を目指す研究分野の1つに、アサーションに関する研究がある。

アサーションとは、自分も相手も大切にしたい自己表現を表す概念で、主張的行動とも言われる。社会的スキルの1つである。アサーションには幾つかの定義があり、濱口（1994）は Deluty（1979）

¹ 山口芸術短期大学

に基づき、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を、敵対的でないしかたで表現する行動」と定義している。また、柴橋（2004）は平木（1993）に基づき、「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直にその場にふさわしい方法で表現し、そして、相手が同じように発言することを奨励しようとする態度」と定義している。

このアサーションは、児童、生徒、成人等、小学校段階以降の者を対象にしたトレーニングの研究・実践として発展し、成果をあげている。中には、自己表現タイプの説明に「さわやかさん」、「いばりやさん」、「おどおどさん」という表現を用いている園田・中釜（2000）や、藤子・F・不二雄のアニメ『ドラえもん』のキャラクターを用いて説明したり、DESC法の説明に「み・かん・て・い・いな」という言葉を用いたりしている鈴木（2005）等、児童に分かりやすい実践が提案されている。

一方、幼児教育・保育の場でアサーション・トレーニングは盛んに行われてはいない。松本（2007）等、アサーションを包含する社会的スキルのトレーニングは幼児を対象として行われているものの、小学校段階以降の者を対象としたトレーニングほど盛んになされてはいない。これは、保育者が幼児教育・保育にトレーニングを取り入れることに対して肯定的なイメージを持っていないためかもしれない。しかし、金山・中台・前田（2004）が述べているように、「保育所や幼稚園については、予防的・発達の取り組みの重要性を強調し、発達早期からの社会的スキル教育の意義を伝える必要がある」のであり、アサーション・トレーニングの意義もまた伝える必要があると考えられる。

そこで本研究では、幼児教育・保育にアサーション・トレーニングを取り入れることに関して保育者経験者が持っているイメージを明らかにする。本研究の目的を達成するため、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）分析（以下、PAC分析）による検討を行う。PAC分析には下位技法として自由連想が含まれており、「被検者自身が、暗黙裡に所有するスキーマに沿って、現象に関する変数を連想していくので、従前の研究者が気づかなかった関連変数や、その関係構造が発見されることが少なくない。」（内藤，2008）という長所がある。したがって、幼児教育・保育の経験を通して形成されたスキーマを所有する保育者経験者がアサーション・トレーニングに関して持っているイメージを詳らかにできるであろう。

方法

調査参加者

保育者経験のある女性2名（6年経験者:A, 38年経験者:B）。

調査内容・手続き

内藤（2002）を参考にPAC分析を行った。まず、アサーション・トレーニングを幼児教育・保育に取り入れることについてどのように思うか、頭に浮かばなくなるまで、浮かんできたイメージや言葉の回答を求めた。そして、頭にイメージや言葉を記入したカード（項目）をプラスであるかマイナスであるかの方向に関係なく重要だと思う順に並べるように求め、さらに項目間の類似度評定を依頼した。類似度評定は、非常に近い、かなり近い、いくぶんか近い、どちらともい

えない、いくぶんか遠い、かなり遠い、非常に遠いという7段階であり、それぞれ0点から7点までの得点を与えて類似度距離行列を作成した。

この類似度距離行列に基づき、ウォード法でクラスター分析を行った。その結果明らかになったデンドログラムに基づいてクラスター分割の原案を作成し、それを調査参加者に提示した。続いて調査参加者にクラスターの解釈やクラスター間の相違について尋ねた。さらに、各項目が+（プラス）、0（どちらともいえない）、-（マイナス）のいずれに該当するか回答を求めた。

結果と考察

Figure1, Figure 2 は、イメージ・言葉の類似度評定に基づくクラスター分析によって明らかになったデンドログラムである。また、Table1, Table2 は、クラスターに含まれる項目内容、連想順、重要順、イメージ評価を表示したものである。

保育者経験者 A

Figure1 に基づき、2つのクラスターに分割されるという実験者の原案を保育者経験者 A に提示し、解釈を尋ねた。その結果、クラスター1は「アサーション・トレーニングの否定的側面」を表し、クラスター2は「アサーション・トレーニングの肯定的側面」を表しているのではないかという回答であった。また、アサーション・トレーニングの大切さを認識しつつも、幼児（特に年少児）にとっての難しさや、トレーニングとして実践しなくとも普段の園生活の中で、保育者の注意によってあるいは子どもたち自身の体験によって、アサーションを身に付けられる可能性があるのではないかという考えを述べていた。

Table1 から明らかなように、保育者経験者 A の連想順の上位は、1位「教師としては子どもがアサーションを身につけてくれると楽だ。」、2位「アサーションは人間関係を築く上で大切なことだ。」、3位「トレーニングは興味をひくと思う。」であった。連想順は自由連想におけるアクセスのしやすさを表しており、幼児教育・保育にアサーション・トレーニングを取り入れることに関して肯定的な考えが初めに連想されたことが分かる。

しかし、重要順の上位は、1位「喧嘩も成長過程では大切だ。」、2位「日々注意しているのであえてトレーニングの形でやるのはいかがなものか。」、3位「幼児が自分と相手を大切にしてコミュニケーションするのは違和感がある。」であった。重要順は主訴を表しており、幼児を対象にしたアサーション・トレーニングには違和感を持っていることが分かる。

このように、保育者経験者 A は、幼児教育・保育にアサーション・トレーニングを取り入れることに関して肯定的な考えを初めに持ちながらも、主訴としては幼児を対象にしたアサーション・トレーニングに違和感を持っていた。これは、クラスター1「アサーション・トレーニングの否定的側面」において+イメージが5つに対して-イメージが6つあることから分かるように、トレーニングに関する葛藤²として表れていると考えられる。

² 内藤（1993）は、「態度対象を含むクラスターを構成する各項目のプラスとマイナスの判定を被験者に求め、合計点を算出することができる。」「各クラスターごとにプラスの項目だけの合計点とマイナスの項目だけの合計点を取り、それらを比較することで両面価値感情や葛藤の指標とすることができる。」と述べている。

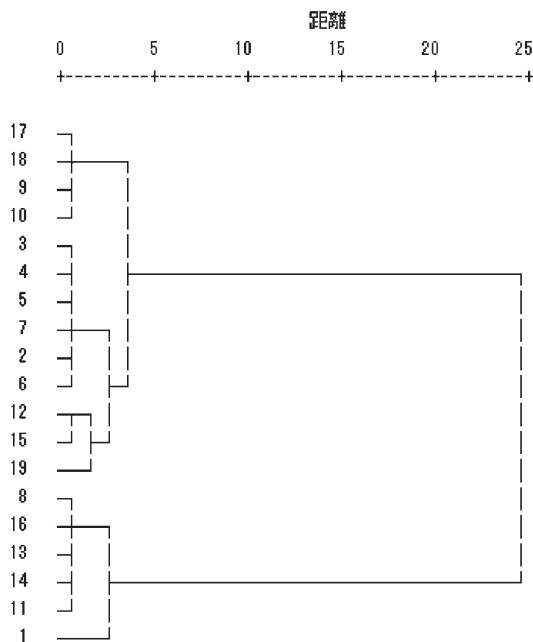


Figure1 保育者経験者 A のデンドログラム (左の数字は重要順)

Table1 保育者経験者 A の連想順, 重要順およびクラスター分析結果, イメージ評価

連想順	重要順	イメージや言葉	+, 0, - イメージ
クラスター 1 「アサーション・トレーニングの否定的側面」			
15	17	トレーニングは長いイメージがある。	-
16	18	子どもには集中力に個人差がある。	+
14	9	トレーニング時間が終わるまで子どもは待てないのではないか。	-
17	10	幼児に 40 分のトレーニングは無理だが, 内容に依る。	0
7	3	幼児が自分と相手を大切にコミュニケーションするのは違和感がある。	+
12	4	トレーニングという言葉に違和感がある。	-
5	5	個性が失われる恐れはないのか。	-
11	7	年少児はまだ集団生活に初めて入った状態だ。	+
4	2	日々注意しているのであえてトレーニングの形でやるのはいかがなものか。	+
18	6	子どもには遊んでもらいたい。	+
10	12	年少児はまだ幼い, 年長児にはできなくはない。	0
19	15	園の教育の一環としてやるのはいかがなものか。	-
9	19	小学校中学年児童でも最初はアサーションの意味が分かっていないのではないか。	-
クラスター 2 「アサーション・トレーニングの肯定的側面」			
2	8	アサーションは人間関係を築く上で大切なことだ。	+
13	16	先生によってはやってもよいと思うのではないか。	0
8	13	大人にとってアサーションは大切だ。	+
1	14	教師としては子どもがアサーションを身につけてくれると楽だ。	-
3	11	トレーニングは興味をひくと思う。	+
6	1	喧嘩も成長過程では大切だ。	+

保育者経験者 B

Figure2 に基づき、3つのクラスターに分割されるという実験者の原案を保育者経験者 B に提示し、解釈を尋ねた。その結果、クラスター 1 は「ルールのある活動中における（アサーション・トレーニングの）可能性」、クラスター 2 は「普段の園生活における（アサーション・トレーニングの）可能性」、クラスター 3 は「プロセスの決まっていない活動中における（アサーション・トレーニングの）可能性」ではないかという回答であった。また、幼児対象のアサーション・トレーニングは大切だが、幼稚園・保育所の中でどのように行うかの工夫が必要だという話があがった。さらに、幼児をトレーニングする前に保育者自身がアサーションを身に付けることが大切ではないかと述べていた。

Table2 から明らかかなように、保育者経験者 B の連想順の上位は、1 位「年長児なら可能だ。」、2 位「劇あそびとしてなら可能だ。」、3 位「登場人物の気持ちをどう思うか尋ねることは可能だ。」であった。このことから、幼児教育・保育にアサーション・トレーニングを取り入れることを肯定的に捉えた上で、実践対象や実践方法に関するイメージが初めに連想されたことが分かる。

重要順の上位は、1 位「年長児ならば、日常の子どもの喧嘩を取り上げ話し合うのは可能だ。」、2 位「園生活の中で、されて嫌だったことはあるか聞くことは可能だ。」、3 位「人の物を取るタイプの子ども等に保育者が声をかけることは大切だ。」であった。これらの項目は全てクラスター 2「普段の園生活における（アサーション・トレーニングの）可能性」に含まれることから、普段の園生活の中で可能なトレーニングを重要視していることが分かる。

+、0、- イメージについては、8 項目のうち 7 項目が+イメージの評価であり、保育者経験者 B は全体的にアサーション・トレーニングの導入や実践方法に関して+イメージを持っていると考えられる。

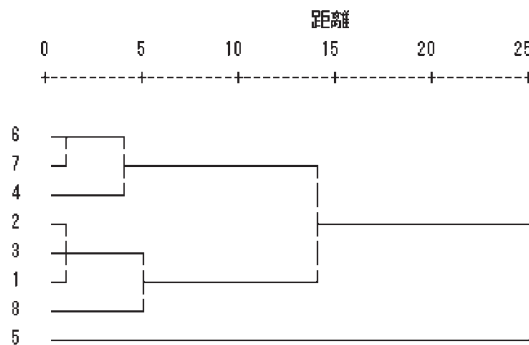


Figure2 保育者経験者 B のデンドログラム（左の数字は重要順）

Table2 保育者経験者 B の連想順, 重要順およびクラスター分析結果, イメージ評価

連想順	重要順	イメージや言葉	+, 0, - イメージ
クラスター 1 「ルールのある活動中における (アサーション・トレーニングの) 可能性」			
1	6	年長児なら可能だ。	+
2	7	劇あそびとしてなら可能だ。	+
8	4	友達の素敵なところを出し合うとよい。	+
クラスター 2 「普段の園生活における (アサーション・トレーニングの) 可能性」			
4	2	園生活の中で, されて嫌だったことはあるか聞くことは可能だ。	+
6	3	人の物を取るタイプの子ども等に保育者が声かけをすることは大切だ。	+
5	1	年長児ならば, 日常の子どもの喧嘩を取り上げ話し合うのは可能だ。	+
3	8	登場人物の気持ちをどう思うか尋ねることは可能だ。	0
クラスター 3 「プロセスの決まっていない活動中における (アサーション・トレーニングの) 可能性」			
7	5	一緒にあそびやものづくりを通して人間関係を学ぶことは可能だ。	+

総括

保育者経験者 A の結果から明らかなように, イメージとして「アサーション・トレーニングの肯定的側面」がある一方で「アサーション・トレーニングの否定的側面」もある。したがって, 保育者経験者 B の結果から明らかなように, どのような形式でアサーション・トレーニングを取り入れていくのが良いのか, 検討が必要である。検討をする上で, 「幼児に 40 分のトレーニングは無理だが, 内容に依る。」「年長児なら可能だ。」「劇あそびとしてなら可能だ。」等の回答は参考になると思われる。またこれらの回答は, 幼児の発達段階や普段の園生活を考慮することの重要性を示唆している。

さらに, 保育者経験者 A, B が共に指摘していたように, 大人のアサーションも大切であり, 保育者自身がアサーションを身に付け, 幼児の良きモデルになることが重要であると考えられる。³

引用文献

- Deluty, R. H. (1979) . Children's action tendency scale: A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 1061-1071.
- 濱口佳和 (1994) . 児童用主張性尺度の構成 教育心理学研究, **42**, 463-470.
- 平木典子 (1993) . アサーション・トレーニング さわやかな〈自己表現〉のために 日本・精神技

³ これまで園田・中釜 (2000) でも「教師自身がアサーションのモデルになる」と表現されている。

術研究所.

- 金山元春・中台佐喜子・前田健一(2004). 一般市民の社会的スキル教育に対する認識と評価 広島大学心理学研究, **4**, 89-96.
- 松本麻衣子(2007). 幼児に対する集団社会的スキルトレーニング—児童養護施設における実践— 帝塚山大学心のケアセンター紀要, **3**, 79-81.
- 内藤哲雄(1993). 個人別態度構造の分析について 人文科学論集(信州大学人文学部), **27**, 43-69.
- 内藤哲雄(2002). PAC分析実施法入門[改訂版]「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版.
- 内藤哲雄(2008). PAC分析を効果的に利用するために 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸 太一(編) PAC分析研究・実践集1 ナカニシヤ出版 pp.1-33.
- 西方 毅・細野一郎・濱野亜津子(2009). 幼児の問題行動の発達的变化 目白大学人文学研究, **5**, 259-270.
- 柴橋祐子(2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.
- 園田雅代・中釜洋子(2000). 子どものためのアサーション・グループワーク 日本・精神技術研究所.
- 鈴木教夫(2005). 小学校教育とアサーション・トレーニング 平木典子(編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ, **450**, 至文堂 pp.37-47.

付記 本論文は、第67回中国四国心理学会にて発表した内容を加筆・修正したものです。研究に御協力頂きました先生方に感謝申し上げます。